

楽しい国語教室

国語科行事古典旅行 万葉旅行—明日香の旅—のばあい

落 健一・江口 修司・金子 直樹・金本 宣保
世良 馨子・竹盛 浩二・信木 伸一・藤原 敏夫

1. 古典旅行の概要

古典旅行というのは、古典の舞台となった土地を訪れることで古典の世界を実感してもらおうという行事である。現地では引率教員が案内・解説を行なう。1974年以来行われ、これまで「万葉の旅」のほか、「源氏物語の旅」・「平家物語の旅」などを実施した年もある。

1996年の春、万葉旅行—飛鳥の旅—という旅を実施した。これは、飛鳥を自転車で巡って万葉の世界を実感し、また現地で自分たちの万葉集を創作してみようというものである。

目的

古典を生んだ風土に触れて、古典学習をより楽しく深いものにする。

『万葉集』を実感をもって読む

日時

場所

奈良県橿原市、高市郡明日香村

参加者

4年生（高校1年生）希望者31名

事前学習会など

古典旅行打ち合わせ会

3月11日（月）15：50～16：30

- ・日程の説明
- ・学習グループの編成と課題の選択

古典旅行事前学習会

3月18日（月）14：50～16：30

- ・「しおり」作成
- ・「万葉の時代」時間軸を辿る

旅行日程

3月27日（水）

福山（9:00）—新幹線—（10:33）京都（10:45）—近鉄特急—（11:34）橿原神宮前

豊浦寺 小墾田 雷丘 甘樫丘 藤原宮跡 磐余の池

天の香具山登山、

3月28日(木)

飛鳥寺 大伴夫人墓・藤原鎌足誕生地 板蓋宮跡 橘寺 川原寺跡(昼食)
橿原神宮前 —近鉄特急— 京都 —新幹線— (16:59) 福山

2. 事前の学習について

(1) 授業で学習

古典旅行は希望者の参加であるが、授業においても「わたしの古典教室『万葉集』二上山悲歌」と題した単元を実施した。これは、大津皇子物語として構成した単元である。テキストは、万葉集を中心に、日本書紀、懷風藻の大津皇子に関連した記述を取り上げ、さらに独自の鑑賞を交えたものを作成した。以下、その中で取り上げている歌の詞書き及び詩題によって構成を示す。

「大津皇子、^{いしかわのいらつめ}石川郎女に贈る御歌一首」

「^{いしかわのいらつめ}石川郎女、和へ奉る歌一首」

「大津皇子、ひそかに^{いしかわのいらつめ}石川郎女に婚ふ時、^{つものむらじとほる}津守連通その事を占へ露はすに、皇子の作りましし御歌一首」

「^{ひなみのみこのみこと}日並皇子尊、^{いしかわのいらつめ}石川郎女に贈り賜ふ御歌一首」

「大津皇子、ひそかに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の^{おおくのひめみこ}大伯皇女の^{おうた}御作歌二首」

「大津皇子、^{みまか}被死らしめらゆる時、^{いはれ}磐余の池のつつみにしてなみだを流して作りましし御歌一首」

臨終 大津皇子(懷風藻)

「大津皇子^{かむあが}薨りましし後、^{おおくのひめみこ}大来皇女、^{いつきのみや}伊勢の齋宮より京に上る時の御作歌二首」

「大津皇子の^{かばね}屍を葛城の二上山に^{はふ}葬る時、大来皇女の哀しび傷む御作歌二首」

これらの歌を一首だけ単独に解釈・鑑賞するよりも、物語として構成されていることによって、作歌の背景もわかりやすく、読み楽しめる授業にできたと思う。

(2) 生徒が自分で調べて学習

古典旅行打ち合わせ会の際に次のような課題を生徒各自に与え、事前学習会までにそれらを合わせて独自のテキストを作ることにした。

課題：「次の項目について、関連の万葉集の歌の解説を交えて、紹介文を書いてください。関連する重要な人物についても解説を加えてください。和歌については、推薦したいものを選んで、紹介してください。各項目は、参加者に分担します。各自、現地で皆に説明できる程度に見識を深めておいてください。原稿の締め切りは、3月15日(金曜日)12時までとします。」

1. 豊浦寺(とゆらでら)跡

巻八1557、1558、1559

2. 小墾田(をはりだ)

巻十一2644

3. 雷丘（いかづちのおか）
卷三235、324 卷七1125
4. 甘櫃丘（あまかしのおか）
卷一51 卷一78
5. 大和三山一天の香具山、耳成山、畝傍山
卷一2、13、14、28 卷十1812 卷十六3788、3789、3790
6. 二上山（ふたかみやま、現在「にじょうざん」）
卷二165、166
7. 飛鳥川
卷三324、325、356、437 卷四626 卷六969
卷七1125、1126、1366、1379、1380
卷八1435 卷十1878、2162 卷十一2701、2702、2713、2715
卷十二2859、3266、3267 卷十三3268
卷十四3544、3545 卷十九4258
8. 藤原宮跡
卷一52、53、78 卷十2289
9. 磐余の池（いはれのいけ）伝承地
卷三416
10. 飛鳥浄御原宮（あすかきよみはらぐう）跡
卷十九4260、4261
11. 真神原（まかみがはら） 飛鳥寺 飛鳥板蓋宮「あすかいたぶきのみや」伝承地
卷六992 卷八1636 卷十三3268、3269
12. 大原の里（小原） 藤原夫人墓 中臣（藤原）鎌足誕生地
卷二103、104 卷四513 卷八1465 卷十一2587 卷二十4479
13. 橘寺（たちばなでら）
卷七1315 卷十三3822 卷十六3822 卷十八4111
14. 川原寺
卷十3849、3850
15. 柿本人麻呂

（3）事前学習会で学習

事前学習会は、『万葉の時代』時間軸を辿る」と題した講話とした。蘇我馬子が厩戸皇子のらと共に物部守屋を滅ぼしたころから藤原京遷都までを、史話と歌を交えた教材を作成して、歴史的背景を学習させた。

3. 現地での学習 生徒が創作した作品から

生徒は要所で、引率教員の案内・解説を聞いたのち、自由に散策する。そこでは何かを覚えることが学習なのではない。興味を引くものを見、そこにあるものに触れ、その風や空気に触れることが学習なのである。自転車の移動の多さを嘆く生徒もいたが、そうしてわかる距離感覚さえもまた万葉の世界を垣間見ることなのである。生徒たちは、生き生きとしていて、同時にのんびりとした平和な時間を過ごした。

宿に着いてからは（二日目は帰りの新幹線の中で）「今日感じたことをもとに、和歌などの作品を作ろう」という課題にとりくませた。書く材料があるからであろう、これは苦しみつつも熱心に取り組んだ。生徒たちがこの旅行で何を感じたかは、そのときに創作した作品をみていただきたい。

なお、作品を書く目的として、インターネットの我校のホームページに載せるということを提示した。このことも書く動機づけとなっている。

いつかまた桜吹雪を見に来たい風の香りの甘樫丘 小西麻喜
遠き日のさよ吹く風は変わらねど人の心はいかがかと知る 大本耕三
甘樫に思ひ浮かべし咲く桜やさしき春を感じたりけり 新村響子
いかづちをうけし丘より垂れおちる枯れ草を見てふと我を見る 矢根美紀子
我が心にしへの歌に重ねつつ飛鳥の里をめぐりけるかな 新村響子
この里を昔の人はどう愛でた春の初めの明日香の村よ 土田悠子
はるかより進まず退かず恋しつつ静かに燃ゆる大和三山 加藤雅子
白絹のたなびくそでを見かければ春の近きを今かと知る 大本耕三
明日香風かすかに桜の香をはこぶ明日香の里のとわの都に 加藤雅子
明日香風つばみふくらむ桜木のまだ見ぬ花を夢に散らさむ 矢根美紀子
明日香路に桜の蕾手に取りて太古より巡る春をぞ思う 土井里紗
「ああ春だ！」今も昔も変わりなき緑の中の心のはやり 今井文野
澄み渡る明日香の空を見上げれば本当の自分見つけだすはず 三輪泰史
香り立つ緑萌え出づ道果てて空へたたずむ夢の跡かな 田井祐子
明日香には昔の香り残れども景色はなかなか見えてこず 藤原弥生
桃ひらく古都明日香村の大地踏みはるかとき越え想い受け取る 小原寿子
ひっそりと明日香の里の桃の花 中山史子
飛ぶ鳥の明日香の里は霞めども八朔の香はたしかにぞ残る 読み人知らず
明日香路は行けども行けども道はおわらず一人止まりてじっと手をみる 大本珠江
明日香路をぬるき風が吹き抜けるオレンジ色の自転車がゆく 中井敏恵
さらさらと砂のごとくに流れたる時間よ止まれ飛鳥にて思う 今井文野
奈良の里河川は常に流れつつ時はしばしぞ立ち止まりつる 太田晴喜
飛鳥川歴史はあれど水はなし工事の人に友は手を振る 読み人知らず
明日香川瀬瀬にごみは落ちたれどしがらみあれば浄化さへなく 読み人知らず
橘寺五円を入れてみたもののドラが鳴らないはてさてうむむ 富田愛佳

冷たき床坐禅をくみて紅に焼ける大仏目に浮かべけり 山下洋子
飛鳥寺もえる若草したがえてよみがえるかも朱き回廊 寺岡由恵
野原にてなびく黒髪美しく側のタンポポ蝶とまりしぞ 三輪泰史
川原寺みんなさがしたクローバー希望の春に胸おどらす 広中隆樹
うらかな春の陽受ける石舞台太古の人ぞ静かに眠る 広中隆樹
二日目は黒丸ばかりのこの車内就寝時間がうかがえるかな 寺岡由恵
とき移り名残惜しきこの里にただ想いのみはせにけるかな 大本耕三

無 題 葉 月

世の中は 繁き仮廬に ありけれど
この春野の原 しじ芽吹き しじ花咲きて
光満ち 命満ち 神代より 世の果つまで
水流れ 時流れ 人は移れど
幾喜び 幾悲しみに
人は生き 命は伝い 我も生く
この美しき 繁き仮廬で

明日香 矢根美紀子

明日香の里の
花の香を
今日香るか
明日香るか
待ち続ける
万葉人に
我が心を
つなぎたい
まだ見ぬ桜は
甘檜にて夢に散る
独り咲きたる山桜は
その香を風に託す
動かぬ時の中
すべてを知るは
くもりのない空だけか
はたまた小さな梅だけか

明日香を想う 三宅真希子

澄んだ空に白い雲が流れ
木々草木に春が宿る
うららかな日射しを存分に浴びつつ
眼下に広がる大地を見る
瞳を閉じて古代の栄華を思い
瞳を開けて諸行無常を感じる
耳元で風がそっとささやいた
見上げた桜が
今花開く

私が淋しくなった理由 今井文野

「時の流れは不変」ある人はそう言って笑う
「どんなことがあっても時は流れ続ける」
実際はそうなのだろう たとえ遠い過去 多くの人が
一血を流し 夢を叶え
いくつもの恋を失い 風景の美しさに涙した—
そんな土地であっても 時は決してよどむことはない
実際はそうなのだろう
飛鳥は時の流れを失っている たとえ
—どんなに近代的な家が建ち
私たちが洋服を着てサイクリングし
自動車が行き交っていても—
ここでの時の流れは失われている
—そう信じたかった
—そう信じられるところだった—
駅に着く
「時が止まっていた飛鳥」が少し恋しくなったとき
私は近くを通った人が持っていた新聞を見た
—知らないニュース—
あらためて気づく
あの土地にも時は流れているのだ、と
時は止まっていたのではなく
止まっているように感じられただけなのだ、と
そして私は少し淋しくなる
私たちは 電車に乗り 新幹線に乗り

「すごい勢いで流れている」そう感じられる
時の中に 今 戻っていく

L I F E 山本俊太郎

大きな都の中で
昔 人は歴史の上で
自分を生きた
今 子供たちが走っている
その顔に浮かぶひたむきさを
彼らは持っていたらどうか
巨大な街の中で
今 人は現代につぶされぬように
息をしている
昔のMACHIを流れた
時間の流れを
感じないままに僕らは
生きていくのかい

随想「甘樫丘に思う」 新村響子

甘樫丘の頂上に立つと不思議な開放感を覚える。天香具山に登ったときとも、あの広大な藤原京跡地に立った時とも違う。その違いは一体何だろうと考える。その違いは「明日香風」なのではないかと、ふと思った。

あと十日ほどで満開になるであろう桜のことを思い浮かべてみる。藤原京の桜ははらはらと舞い落ちる。朱塗りの建物を思い浮かべても、その情景はとても静かだ。ところが甘樫丘の上で目を閉じて浮かんでくるのは、桜吹雪。明日香風が花びらを舞い上げる。

犬養博士はなぜあの丘の碑に志貴皇子の歌を選ばれたのだろうかとずっと考えていた。

「妥女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く」

甘樫丘に特に関係がある訳でもない、望郷の歌である。裏には天智天皇の第七皇子であり、時代の流れに取り残されてしまった志貴皇子の悲しい思いがあるだけだ。そこでやはり、「明日香風」を思いついた。甘樫丘の上で感じる、あの不思議な明日香風。あの風にこの歌はピッタリだと思う。政治的な意味も、望郷の思いも考えずに、純粹にこの歌から感じるのはさわやかに吹き抜ける明日香風だ。犬養博士も甘樫丘で明日香風を感じられたのではないだろうか。そして、そんな明日香風を感じ、開発が進む町の中で、古代飛鳥の情景を思い起こしてほしいという願いを込めてあの歌を選び、石碑に刻まれたのではないだろうか。

単に丘の上だから？と言ったら簡単かもしれない。でも実際風が吹き上げてくる訳でもないのに、実によく明日香風を感じることができる甘樫丘。頂上に立った時感じる気持ちの良い開放感を私は

忘れることができない。甘檜丘は、明日香風を感じ、古代飛鳥を感じることができる不思議な場所なのだと、私は思う。

創作「甘檜丘の上で」 小西麻喜

意のままにできると思っていた飛鳥の都を、彼はわずかな痛みとともに見下ろした。

全ては、彼の思うように進んだのだ。

しかしこの空虚な気持ちは何処から来るのだろうか？何を、手に入れようとしていたのだろうか。何が欲しかったのか……。

春に美しく咲き誇っていた桜は散り、今日は青々と葉が茂っている。庭が桃色に埋めつくされていたあの頃には、まだこんな感情は無かった。

いつから何が狂い始めたのか……。いや、何も狂ってはいない。全ては、……

騒ぎ立てる声が近づいてくる。兵がこちらへ向かっているのであろう。我が子の血を吸ったその剣で、あの男は私を殺そうとするのか。しかし、他人にやすやすと奪われるような命ではない。

全てを、何もかもを操り、支配するのはこの私だ。この命を支配するの。

薄い微笑すら浮かべて、彼は、その胸に、煌めく刃を突き立てた。鮮血を散らし、ゆるやかに倒れ込む。手にした栄誉を象徴する金色の宝物の上に。

どこかでわかっていた。いつかこんな結末がおとずれることも。けれど定めたのは神でも運命でもない。

全ては、自ら選んだ結果。何もかもが最期には、自分の選んだとおりの道をたどるのだ。

王者のような、けれども飢えた光をやどしたまま、彼は最期の吐息をついた。

(上記以外にも感想文が十数本あるが、ここでは掲載を略す。)

これら、生徒作品は、本校国語科のホームページに掲載している。

現地に赴いてみても、古典の世界の物はほとんど残っていない。風景も当然変わっている。それなのにその地を旅する価値があるのか。

生徒の作品を生んだ力は、「想像力」である。古典の世界を「実感する」ということは「想像することだとも言えるだろう。もちろん勝手な想像は誤読でしかないから慎まなければならないが、古典を味わうということの一つは「想像」する楽しみである。生徒の作品には、遠い過去を感じさせるものだと思って見ることによって万葉の時代を思いやったものがあり、また一方では日本の平凡な田舎の光景にがっかりしたものもある。どちらにせよ、この地に来たことが一様に時の流れや人の営みというものを感じたり考えさせられたりするきっかけになっている。また、ここに来なければ生まれなかった万葉の世界の輪郭（イメージ）というものもあるのである。

桜の花を慕うものが目立つ。まだ桜の開花には早すぎる時期の旅行を残念に思う気持ちである。しかし、甘檜丘の桜の樹を見て、満開の桜は心の中に描かれている。